



東京多摩プロバスニュース

第 39 号

■事務局：〒206-0034 東京都多摩市鶴牧 5-29-10 平田方 ■編集・発行：編集委員会 2011. 11. 2

■電話・FAX (042) 338-7022 ■URL: <http://www.tokyo-tama-probusclub.com>

共に学び、活動し、自己実現と社会貢献を

第 87 回 定例会

日 時：平成 23 年 9 月 7 日(水)午後 1 時 30 分より

場 所：多摩市関戸公民館第 2 学習室

出席者：28 名(会員数 36 名)

第 88 回 定例会

日 時：平成 23 年 10 月 5 日(水)午後 1 時 30 分より

場 所：関・一つむぎ館第 1 会議室

出席者：25 名(会員数 36 名)

理 念

1. 豊かな人生経験を生かし地域社会に奉仕する
2. 活力ある高齢社会を創造する
3. 会員同士の交流と意欲の向上をはかる
4. 非政治的、非宗教的、非営利的であることとする

◇◇◇ ごあいさつ ◇◇◇

「活力ある高齢社会に」 総務委員長 北村克彦
中国の詩人沙孟海が、友人の 80 歳の祝いに贈ったという詩に、こんな一節があります。

「100 歳は古来稀なり。90 は奇とするに足るなし。80 は大いに為すべし。70 は得ること多し」

私は 70 歳を過ぎてから当クラブに入会しました。今まさに得ること多い生活を送っています。

全般的にプロバスクラブの求める方向として、会員相互の親睦を主にしているところと、社会奉仕を大きな柱として活動しているクラブがあります。

当クラブの理念として「豊かな人生経験を生かし、地域社会に奉仕する」という大きな柱があります。このことを念頭に置きつつ、私は今、興味と関心の向くままに新たな友情を求めて、会員相互の研修・親睦の機会にできるだけ参加し、「活力ある高齢社会を創造する」ように心がけています。結果として、若い人達に迷惑をかけず、地域の人たちとの交流の中でお役にたつことがあると思っています。「老いたものも、仲間同士で集まれば若やぐ」(ガルシア マルクス)と感じています。

私たちは「若い」を避けては通れません。視力、聴力、味覚、皮膚感覚、運動感覚といったものの衰えを感じるものがしばしばです。機械だけでなく、人の心も体も使わないと錆びつくと、自身に言い聞かせています。

先日、定例会での卓話で山田正司会員から、「ふるさとは、近くにありて作るもの」というお話を伺いました。同感です。今住んでいる多摩市をいとおしんで、新しい仲間「東京多摩プロバスクラブ」の皆さんと余生を楽しんでいきたいと切に望んでいます。



鮮やかな紅葉のモミジバフウ並木 (多摩市上之根通り)

1. 幹事報告

稲田興幹事

東京多摩プロバスクラブはめでたく第88回目の定例会を迎えました。人間の長寿を祝う「米寿」の回数に相当します。これまでの皆様方のご努力に敬意を表します。

1.1 対外活動

今年度の活動方針の中の大きな取組みとして「対外交流を進めよう」というテーマを掲げたが、この交流活動に盛り上がりを見せてきた。

1)大阪 PC10 周年記念式典 9月12日(月) ホテル新阪急(大阪)で開催。大澤会長・滝川委員長・神谷副幹事 計3名出席。

2)日野 PC1 周年記念式典 9月15日(木) 高幡不動尊客殿で開催。新旧の会長・幹事 計4名出席。

＜今後の交流計画＞

3)11月17日(木)八王子PCが中心となり、関東地区の10に及ぶPCに声を掛け、一堂に集まって交流会を開こうとの計画が持ち上がった。誰でも参加でき、近場でもあるので、多くの方々の参加を希望する。

4)11月24日(木)横濱PCを招待して行う交流会を計画。5月に訪問したお礼も兼ねており、全会員で歓迎したい。なお、今後とも横濱PCとの間で何らかの形で交流を続けていく考えであり、交流内容については今後理事会で検討していきたい。

1.2 十周年記念事業企画プロジェクトを発足

プロジェクトメンバー16名(理事8名プラス各委員会から4名及び女性陣4名)で10月15日(水)発足させた。

2. 委員会・プロジェクト報告

2.1 総務委員会

北村克彦委員長

1)8月度定例会(8月3日) 出席:30名 欠席:3名

卓話は、小西加葉子会員による「武道に魅せられて」で、概要は第38号プロバスニュースに掲載。

2)9月度定例会(9月7日) 出席:28名 欠席:5名

講話は、ワールド・ハート・プロジェクト代表の横島文美様と実行委員の近藤繁様による「東日本大震災一被災地の現状と私達にできること」で、概要は3頁上段に掲載。

3)10月度定例会(10月5日) 出席:25名 欠席:8名

卓話は、山田正司会員による「知のミュージアム多摩・武蔵野検定」で、概要は3頁下段に掲載。

2.2 地域奉仕委員会

西村政晃委員長

8~9月の間、「市民企画講座」(関戸公民館共催)の計画を進めてきました。専門性の高いテーマなので、講師の選定とスケジュール調整が難航しましたが、次のとおり決定。

今月末の来年度裁判委員候補者の通知を控え、会員の皆様には是非ご出席ください。

- ・開催日時 12月17日(土)14:00~16:00
- ・開催場所 関戸公民館8階 大会議室
- ・講師 一橋大学大学院教授 後藤昭先生
- ・テーマ 裁判員になるかもしれないあなたへ

2.3 研修・親睦委員会

滝川益男委員長

1)今年度第1回研修会「登戸研究所資料館」(川崎市・明治大学構内)見学を10月7日(金)に行った。参加者13名。

2)近隣クラブとの親睦交流会の一環として、「横濱プロバス倶楽部」を迎えて「多摩の紅葉狩りとニュータウン散歩」を11月24日(金)に計画・準備中。現時点で横濱PCから15名、当PCから20名参加予定。

2.4 広報委員会

増山敏夫委員長

1)本第39号より会員の寄稿「私の多摩ニュータウン」をシリーズで始めます。

2)当HPの2011.9.19. 更新版からアクセス回数を累計表示するカウンターを設けた。

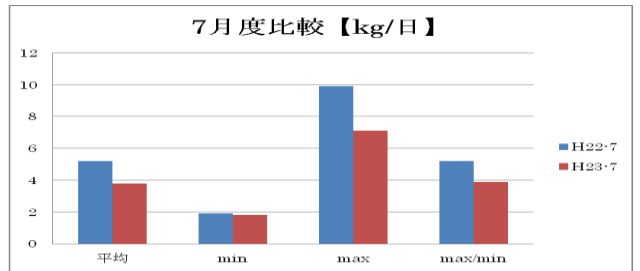


広報委員会の皆さん

2.5 環境問題プロジェクト

村上伸茲リーダー

1)7月度炭酸ガス排出量調査結果報告



今回実績を前年同月と比較すると、炭酸ガス排出量は全体平均で24%もの削減ができた。大変大きな改善となり、中には削減率40%という方もおられた。皆様方の努力に敬意を表します。ただ、21名中4名の方が前年比で増加させたのが気掛かり。これらはいずれもガソリン消費が多かったためでした。最大/最少幅も少しずつ縮まってきている。

なお、今回は原発事故問題で、特に夏場の節電をテーマにしたつもりだったが、この電気の使用量だけを見ると、10.6%の削減に止まり、目標の15%には届かなかった。ただ、中には電気使用量を33%も削減された方もおられます。

今後とも電気とガソリンの利用効率を重点的にとらえて、無駄の排除・改善に取り組んでいく必要があります。今回は、これからの寒さ対策として、ウォームビズに関する資料を作成し、全員に参考資料として配布した。

2) 養蜂計画

かねてより、多摩ミツバチプロジェクトから養蜂の技術指導を受けてきましたが、「多摩プロバスクラブとして独立して養蜂をやらないか」とのお墨付きをいただいた。

そこで、来春の養蜂シーズン開始時期にあわせて作業ができるように、プロバス内部に養蜂サークルを結成し養蜂の準備を始めることを決めた。サークル入会者を募集したところ11名の応募があり、オリエンテーション(養蜂とは、作業・道具、生物多様性との関係など)の学習を直ちに始める予定。

突如襲った東日本大震災から6ヶ月経過した。東京多摩プロバスクラブとしては義援金の支援をしたが、復興には長期にわたる支援が必要だと思う。そんな中「ワールド・ハート・プロジェクト」の皆さんが現地を訪問され、世界の子供達からの励ましの絵を届けるなど、被災地の支援活動に力を注いでいる。平成23年9月7日、第87回定例会にて「東日本大震災—被災地の現状と私達にできること」と題してプロジェクト代表の横畠文美様、実行委員の近藤繁様から講話をいただいた。その要旨を掲載する。

東日本大震災—被災地の現状と私達にできること

(社)Hearth 代表理事 横畠文美 理事 近藤繁

1. ワールド・ハート・プロジェクトを始めたきっかけ

大震災の後、横畠さんの元に、世界中の友達から何か助けになりたいとメールが続々と寄せられた。彼らの日本への思いを被災地の人々に伝えるために、世界の子供達に被災地への思いを絵に描いてもらい、それを見てもらって勇気づけたいと考え、各国の友人に呼びかけたところ300枚以上の絵が届けられた。

子供達の温かな贈り物が世界と日本の人達をつなぐことを願って、世界の絵キャラバン隊を立ち上げた。

2. ワールド・ハート・プロジェクトの今までの活動

7月には世界の子供達の絵を東京都内、宮城県名取市で展示、併せて宮城県名取市、東松島市での子供用夏服・大人用夏服・子供用文具・玩具のプレゼントを実施した。

8月には宮城県名取市の「なとり鎮魂灯籠流し」で、世界の子供達の絵と宮城県の子供達の絵を使用した。

3. 震災の現状

震災に対して、何ができるか、現場を見ないのではこれからのことは何も言えないのでは



横畠文美様



近藤繁様

との思いから7月の宮城県名取市へのキャラバン隊第2陣に参加した。被災地の静けさと漂う腐臭、破壊された街、ガレキの山々、海水の被った農地など震災の悲惨な情景を目のあたりにした。支援物資の段ボール箱を開けたとたん物資はすぐになくなってしまふ。九死に一生を得た人が、奇跡としつつも現実を受け止めながら助け合い、励まし合い、支え合いながら懸命に生きているのだと、また人との絆は、全く揺らいでいないと感じた。

4. これから私達にできること、求められていることは

家族や大事な人を失った人達がいることを忘れてはいけない。地域による復旧・復興の格差が見られる。自分にできることを継続的に支援していくことと、皆に伝えていくことが、益々必要だと思う。引続いてキャラバン隊を編成して支援活動していくつもりである。

講話後、衣類の提供を会員に募ったところ、段ボール8個分の衣類が集まり、9月24、25日プロジェクトに託して現地に届けてもらった。仮設住宅の皆さんが全てお持ちになったそうです。プロジェクト活動支援カンパは25千円集まりお渡しした。

文責 総務委員長 北村克彦

知のミュージアム多摩・武蔵野検定 山田正司会員

一地元を愉しむ・タマケン—という副題のつくこの検定の目的は、自分の住む多摩を知り、地域に対する愛情と誇りを育て、「多摩・武蔵野大好き人間」となって、自身の得意分野を生かしたまちづくりなどで活躍してほしいとの願いをこめた地域検定です。わがプロバスクラブの掲げるく共に学び、活動し、自己実現と社会貢献を>のモットーにはからずも同じです。私は3年半前、大病後のライフスタイル転換の時機にこのタマケンに関心を持つようになりました。



検定の主催は(社)学術・文化・産業ネットワーク多摩で、東京都や多摩30市町村すべてと地域の産業界も積極的に応援しています。毎年11月下旬に実施され、今年の会場は明星大学日野キャンパスです。マスター3、2、1級

が同一日に実施されて年末には合格発表される予定です。平成20年度より実施され、3年間でマスター3級合格者1,717名(合格率約75%)、2級315名(約50%)、1級2名(2.2%)の実績となっています。検定には、公式テキストがあり、多摩の姿・歴史と遺産・産業と文化に分かれ、他に多摩で活躍する大学と企業一覧も含めてB5版240頁におよぶ充実した内容となっています。ただし、試験問題はすべてこのテキストからとは限らず、級が上がる程にその内容に準拠する比率が高まります。1級は、その合格率からもわかるように、論述もあり、極めて難問と言えます。平成20年度のマスター3級の試験問題6問を定例会出席者全員に実際に体験してもらいました。

さらに今回の卓話では、自分達の地域の問題として、定例会出席者にも多くの意見をいただきました。地域の将来イメージ等々が議論され参加型卓話となりました。

大阪・東京日野プロバスクラブの創立記念式典に参加して

大澤亘会長

9月第3週に二つのプロバスクラブの創立記念式典に参列した。一つは12日(月)の大阪プロバスクラブの創立10周年記念式典、一つは15日(木)の東京日野プロバスクラブの創立1周年記念式典である。

それぞれの土地柄や歴史を反映したセレモニーで、創立10周年を2年半後に迎える当クラブにとって参考になる点も多かった。一方、これらの記念事業とほぼ時を同じくして、八王子プロバスクラブから当クラブを含む関東地区のプロバスクラブに対してこの秋に初めての交流会を開催したいとの呼びかけがあり、また、横濱プロバス倶楽部の皆さんの多摩市訪問も11月に実現することになった。これらの交流により当クラブの活動の場が一層広がることが期待される。

1. 大阪プロバスクラブ10周年記念式典



滝川益男会員、神谷真一会員とともに参加した。全日本プロバス協議会の金森正夫会長、立川富美代副会長、吉川哲朗幹事長はじめ全国のプロバスクラブが来賓として参加した。会場は梅田のホテル新阪急。出席者は同クラブ会員を含め約60名。式典では、同クラブの成立と発展に貢献した中村健元会長が挨拶の中で“当クラブでは地域奉仕活動は行っていない”

“会員の減少を防ぐため会員資格の年齢制限を撤廃した”と述べられたことが記憶に残った。

また、催し物は“時節柄、華美にならないように”とお話のとおり、男女会員のコーラス、会員によるピアノ演奏、クラブ活動のスライド上映などで、会員による手作りの祝賀会であった。

2. 東京日野プロバスクラブ一周年記念式典



祝賀会で挨拶する
大澤会長

稲田興幹事、鴻池敬和前会長、神谷真一前幹事とともに参加した。全日本プロバス協議会を代表して立川富美代副会長、八王子など近隣プロバスクラブも含め約50名が出席した。会場は高幡不動尊客殿。貫主川澄祐勝氏の記念講演「いのちの限り」が印象に残った。

登戸研究所資料館見学

鈴木達夫会員記

2011年10月7日、小田急線向ヶ丘遊園駅北口午前10時30分に集合。小田急バスにて明治大学正門前着。明治大学生田キャンパス構内にあり、旧日本陸軍の研究施設をそのまま利用したものとしては全国唯一の資料館「登戸研究所(第九陸軍技術研究所)」を訪問する。参加者は13名。

登戸研究所は1939年に設立された帝国陸軍所管の研究機関。約11万坪という広大な敷地の中に、建物約100棟、所属人数1,000名の大きな組織でした。生物化学兵器、電波兵器、風船爆弾、中国紙幣の偽札などのさまざまな謀略戦兵器と秘密戦用の武器・資材の大量生産が行われた所です。



歴史を見守って
来たヒマラヤ杉
の下で説明を聞
く参加者

構内の旧建物を改修した資料館を、案内役の塚本百合子学芸員の解説を聞きながら見学。登戸研究所の全貌・各科の展示概要をDVDで観た後、資料館の展示室五室を案内してくれた。それぞれの展示内容の全景ジオラマ・風船爆弾の模型・電波兵器では超短波を使ったレーダー、謀略兵器・偽札・フラスコ・濾過筒等の展示資料と解説で1時間45分程の見学でした。

先ず驚いたことは、風船爆弾で気球そのものを兵器化し、米国への「謀略兵器」として開発し、米国本土の攪乱を狙う初めての大陸間横断兵器で焼夷弾を具備し、焼夷弾を米国で落とすという詳細な説明を受けたが、気球はなんと和紙・コンニャク糊という伝統技術で作られていた。



風船爆弾の模型

研究所で開発された「秘密戦」技術は、戦後アメリカ軍によって接收され、その後朝鮮戦争やベトナム戦

◇◇◇ 研修・親睦委員会企画(つづき)◇◇◇

争などの際に利用された技術もあると言われています。

大学食堂で昼食後、明治大学構内に保存されている旧陸軍登戸研究所の史跡を見学し、参加者は大変有意義な経験

を得たことと思います。登戸研究所資料館の展示を見て、歴史に対する見方を変える大きな衝撃を受けました。もっと多くの人々に見ていただきたいと思います。

◇◇◇ 私の多摩ニュータウン(1) ◇◇◇

「私と多摩ニュータウン建設」 山田正司会員

急速な戦後復興のさなか、1965(昭和40)年に過密都市東京の住宅事情緩和のために、多摩の4市(八王子、町田、多摩、稲城)にまたがる丘陵地帯に日本最大級の多摩ニュータウン建設が計画決定されました。

東西15km南北2~4km、面積は3,000haにおよぶ人口40万人弱、11万戸の建設が予定されました。新住宅市街地開発法にもとづく、用地買収から住宅建設に至る良好な住環境整備のための総合的開発が、東京都・都住宅供給公社・日本住宅公団(現在のUR都市機構)の3者の事業で進められ、昭和46年に最初の入居者が諏訪永山地区に移り住みました。

◆事務所設立

私がこの多摩ニュータウン建設に関ったのは、最初の入居時から約5年が経過した昭和52年頃からです。当時はすでに多摩市域エリアの大方の用地買収が終わり、基盤整備もほぼ完了していた段階です。つまり集合住宅設計のための宅地はすでに用意されていたと認識しています。大学卒業後の13年半の設計事務所勤めを終えて、独立したての新事務所での意気盛んな頃でありました。前設計事務所では、立場上自ら図面を画くことは次第に少なくなり、若手の指導や経営参加に時間が費やされていた反動もあって、身軽な新事務所では無我夢中で企画・計画・設計・デザインに自ら取り組みました。その努力が報われて、住宅公団本社の設計担当課から、当時としては新企画のタウンハウス設計の業務が委託されました。団地設計の主流であった5階建て階段室型集合住宅はマッチ箱の並んだ画一的団地と揶揄されはじめた頃でした。

◆「タウンハウス諏訪」の設計

タウンハウスは、はじめは低層高密度住宅と称し、わが国ではいまだ未知の領域でした。海外事例の調査、団地内土地利用、密度、景観、間取り等々の検討課題をクリアして、公団型プロトタイプが次第に出来上がっていきました。この作業は、公団本社設計課が主体となり、時に数社の設計事務所のアイディアで競ったこともありましたが、一貫して私の事務所がこの公団型タウンハウス(後に都市型低層住宅)企画に従事することができました。公団型タウンハウスとは、集合住宅のメリットを活かしながら住宅の性能は限りなく戸建住宅に近いことを目指しました。その結果、住戸はすべて専用庭を持ち、豊かな共用庭をコミュニティ形成に役立てつつ、戸数密度(容積率40~60%)を高める

ことが義務づけられました。

ほぼ2年にわたる企画設計段階を経て、いよいよ多摩ニュータウンでの実現化の運びとなりました。多摩ニュータウンは、通常、公団の東京支社設計課の担当でしたが、公団タウンハウス第一号の実現化には、異例の全面的本社指導による実施となりました。敷地は諏訪3丁目の南北に細長い1.3ha弱の平地が選ばれ、戸数58戸、住戸タイプ3LDK、4タイプで決定しました。企画設計に充分時間をかけた分、実施設計、建設工事は順調に進み、昭和54年3月にタウンハウス諏訪として新しい入居者を迎えました。応募倍率は過去の公団記録を大きく塗り変える程の人気でした。わが国の住宅需要が、量から質へと大きく変化する時代の前ぶれであったと思われる。



「タウンハウス諏訪」鳥瞰スケッチ

◆その他の担当

昭和56年頃には、多摩市域でのニュータウン住宅建設は落合・鶴牧地区に移っていました。宝野・奈良原公園周辺には景観上タウンハウスを建設するよう多摩市から公団に強い要望があり、再び私はタウンハウス落合・鶴牧の配置設計とタウンハウス落合の建物設計を担当することになり、その後も稲城市域の向陽台・長池・若葉台地区の一部、八王子市域の堀之内駅前、長池地区の一部と継続して公団の集合住宅設計に関ってきました。タウンハウス諏訪と同様に、語れば尽きない思い出には事欠きません。

仕事を離れた今も、私にとっての多摩ニュータウンは常に気掛かりです。設計は一時のことですが、その後人々がそこにどのように暮らし、建物が、街が今後ともどうなっていくのか心配です。これからの私に何ができるのかも大きな課題です。

◆グルメサークル「駒形どぜう」 平田哲郎会員

連日の炎暑に喘ぐ8月11日、岡野会員出展の「イタリア中部山岳都市を描く・帰国展」を京橋の画廊で鑑賞（前38号プロバスニュースで詳細既報）したあと、グルメの好事家（こうずか）5人衆（滝川夫妻、岡野、神谷、平田）は江戸風の“暑気払い”にならい、伝統の「どじょう料理」に挑戦することになった。

選ばれたのは、創業200余年という浅草に程近い「駒形どぜう本店」、現在では都内でも数少ない老舗である。

京橋から、35度近い酷暑の中を駒形橋ちかくの店に辿りつき、由緒ある暖簾をくぐり、紺の久留米がすりの浴衣に白エプロンの昔風の女性に迎えられた。店内は連日の猛暑にも拘らず大変に込みあっていたが漸く一角に席を確保しほっと一息ついた次第。

創業以来、約200年間まったく同じ料理方法によるといわれるメニューから「どぜうなべ」、「どぜうさきなべ」、「柳川なべ」「どぜう蒲焼」を注文し、みんなでそれぞれに箸をつけ独特の食味を賞味した。「泥鰌」という非日常的な食材に挑戦するとあって聊か気負って食したが、意外に柔らかく脂の乗った食味に納得した。江戸っ子は脂の乗った「夏のどじょう」を食べれば肌もプリプリすると大汗をかきながら食したとのこと。

◆旅サークル「上高地・安曇野旅行」増山敏夫会員

上高地（10月18日）急坂トンネルを登りきると上高地。正午、バスは終点のセンター広場に到着。一般車両の規制のおかげで誠に静か。ここからは歩きた。山並が迫り、奥座敷の感じが強い。河床まで透き通る梓川、そして河童橋。湾曲した穂高山塊の大岸壁が迫る。まるで絵葉書だが文句なしのビューポイントである。橋を渡り数分で日本山岳会の3階建のロッジ「山岳研究所」に到着。いかめしい名前は国立公園内の建築規制の故。研究施設として立派なミニ水力発電所がある。宿泊者は我



梓川の清流から穂高を望む

左から永田・稲田・増山・西村・鴻池・大澤・平田・神谷各会員



「駒形どぜう本店」の前で、左から
岡野・滝川（道）・平田・神谷・滝川（益）各会員

当店では「泥鰌」は大分県宇佐市産の「院内どじょう」に限り、特に6～8月にかけてのものは“子持ちどじょう”でカルシウム分を卵にとられて特に柔らかくなっているとのこと。

因みに、「駒形どぜう」という独特の仮名遣いについては、文化3年（1806年）の江戸大火で類焼した際に、“どじょう”という四文字では縁起が悪いと、奇数の「どぜう」に変え、その後店の繁盛に繋がったとのこと。

以上、“どじょう”という江戸の食文化の一端を垣間見た満足感を噛みしめながら炎暑の中で解散した。

この三週間後、民主党の野田佳彦氏が自らを泥鰌になぞらえ“泥鰌宰相”としてデビューした。

ター行8名だけ。荷物を解いて往復2時間の明神池まで散策する。唐松の見事な黄葉の中、木道を歩き、緩い山道を歩く。

やがて視界が開け、梓川の清流に出る。対岸は上高地特有の白粉柳が群生し、白く柔かいシルエットが玉石の河原を縁取り、ハイカラな景色である。岸边をしばらく歩くと、奥宮の鳥居に出る。明神池はこの奥、なんと！神池故か拝観料を納めねば観ることができない。そのせいか明神岳の懐に抱かれた神池は神秘的だった。棧橋が突き出て、小舟が二艘繋がれている。見ると「御舟」と書いて「乗るべからず」とあり、神事のためのものらしい。川を渡ると「穂高神社奥宮」の木札が立っている。対岸の鳥居に至る川越の参道なのだ。そして御神体が明神岳の奥、穂高山頂に嶺社が置かれている。復路は山麓の緩い山道を下って河童橋、そしてウェストン碑。夕闇に暮れる穂高を心ゆくまで眺めた。夕餉は西村氏秘伝の登山食。大鍋に持参のソーセージとおでんのパック詰めを放り込み茹でる。氏自慢の手料理の秋刀魚の梅煮、カマンベール、漬物、中村屋仕入れのワイン、焼酎で嬉しい酒盛りになった。阪大出の只者らしからぬ管理人内野

◇◇◇ サークル活動 (つづき) ◇◇◇

氏も参加。みな高齢の輩ゆえ、早々と出来上がった。

穂高安曇野 (10月19日) 穂高には私の恩師建築家の今井謙次の礫山美術館がある。初めて訪れる小さな美術館は、落葉樹の生い茂る中にあった。凹凸のあるレンガ積みの外壁、屋根には風見鶏が付く鐘楼がのる。蔦に覆われ何の衞いもなく自然の風物になりきっていた。おそらく昭和初期渡欧の折、強く印象に残った山岳地方の小さな教会をモデルにしたと思われる。玄関ドアの引き手や覗き窓のグリケートなデザインに師らしい作風が見られ、微笑ましい。

師の標榜したヒューマニズムの建築の好事例であろう。勿論礫山の作品も素晴らしい。中村屋初代夫人・国光に抱いた恋心が透けて見えるという西村氏の解説も礫山好きには堪えられない。

帰路、穂高神社本宮に立ち寄る。本宮にも「御舟神事」があり、奥宮の御舟神事と一連のものであることが解る。安曇野の氏族は海に纏わる事業に携わっていた伝承が記されており、山の神に舟がかかわる謎も解け、本宮・奥宮・嶺宮のストーリーが繋がった。

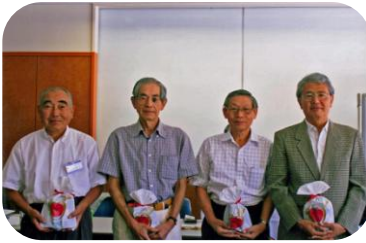
◇◇◇ ハッピーバースディ ◇◇◇

誕生日祝いプレゼント

北村克彦総務委員長

一昨年、昨年はそれぞれ別眺えの「漆箸」と「ぐい呑み」でした。ですが、モノ余りの昨今、後に残らない、それで

いて少しは洒落たモノを考えてみては、ということになり、今年はリーフティー「高野の紅茶」を選びました。朝のひと時、午後のひと時をお楽しみ下さい。



9月&10月の誕生日祝い

9月と10月に8名の会員が誕生日を迎えられました。



9月の誕生日
左から鈴木・増山・登坂・関根各会員 円内は永井会員



10月の誕生日
左から熊本・大熊・中村各会員

◇◇◇ 会員の活動 ◇◇◇

「ちぎり絵作品展」(9月7日~13日) 神谷真一会員

3年前、京王デパートの展示会場でちぎり絵の作品展が開かれていました。初めて出会った様々な作品に心が惹かれ、いつか多摩の美しい風景を作品にしたいと思い、この教室に入会しました。月1度2時間の授業では作品はできず、各自が家に持ち帰り仕上げます。現在、岡本町子先生の元、約20名の生徒(昔のお嬢さん)達に囲まれ、黒1点ガンバッテいます。

ちぎり絵とは絵画と同じように人物、動物、植物、風景などを絵のごとくに表現するものです。台紙の上にお手本を見ながら色の濃淡、薄、厚、模様入り、といろんな和紙を選び指先でちぎったり、水で切ったり、鉄筆ですじをつけて切ったり、ハサミで切ったりしてこれらを重ねながら糊で貼り付けていきます。糊付けは指、筆、ハケなど

を使います。家族に褒められたり、煽てられたりしながら3年を迎えました。

少しずつ作品も増え今回出展することになりました。



出展作品 ふるさとの山河

「護国寺でのお茶会」

小西加葉子会員

10月16日、音羽にある護国寺「不味軒」にて席を持ちました。24才で煎茶道「黄檗東本流」の



門をたたいていつの間にか40

中央が小西会員

年も過ぎてしまいました。10年ほど前から毎年お家元主催の秋の茶会で一席を持つことになり、今年は先代家元が考案された「紅茶手前」をすることにしました。本床には、万福寺57代官長玄妙禅師の「喫茶去」を掛け、その下には青磁の香炉を置き、琵琶床には杜松と「陸羽」の像(茶経3巻の著者で唐時代の方)を飾り、南宗盛の題は「南客」にしました。席は孔雀の敷物の上に道具飾りをし、扇面台の上に茶入れ、水注等載せ、とても華やかな席造りをしました。お客様からも「とても紅茶がおいしい」と好評でした。29.7度の秋とは思えない暑い日で、汗ダクダクのお茶会でしたが、終わってみると楽しい一日でした。

◇◇◇ 私の一品 ◇◇◇

「一塊のベルリンの壁」

永島仁会員

ベルリンの壁がつけられたのは1961年で、東西の陣営が激しく対立していた冷戦の時代である。東ドイツ政府は自国民の西側への流出を阻止するために、全長155kmに及ぶコンクリートの壁を構築した。これにより脱出を試みて射殺されたり逮捕された者の数は、3,000人に及ぶとされている。

私は1963年(昭和38年)ベルリンの壁の検問所チャーリーポイントを通して東独側に入った。

警備兵が物々しく立ちほだかり、検問の兵士からは目的・滞在期間・所持金等を厳しく問いただされ、恐怖を覚えた。フンボルト大学(ベルリン大学)の正門前では交代の兵士が太ももを高く上げて行進していた。これらの様子を隠し撮りした写真が見つからないのが残念だ。

ウンターデンリンデン通りを真直ぐ西に進むとブランデンブルグ凱旋門がある。凱旋門の前の広場には有刺鉄線が敷設されていて、近寄ることができなかった。

私は壁が崩壊してまだ間もない翌年の8月に、再び東ベルリンを訪れることができた。開放からの熱気が冷めやらぬ時であった(壁の崩壊は1989年11月10日)。

ブランデンブルグ門前の有刺鉄線は取り払われているものの、離れた場所にはその残骸が残っている。コンクリートの壁にはハンマーで叩き壊された跡が無数に残り、等身大の穴からは鉄筋が飛び出し、ふざけながら子どもたちが出入りしていた。



写真左：一塊のベルリンの壁

写真下：崩壊したベルリンの壁の前に立つ筆者



この時持ち帰ったのが私の一品である。この壁の破片は長い間我が家に埋もれていたもので、昨年の「多摩プロバスクラブフェア2010」の「お宝拝見」の催しのおり、N氏の強い勧めとお世話で出品したものである。何の変哲もないコンクリートの破片であるが、私にとっては激しく変動したヨーロッパの証である。

◇◇◇東京多摩プロバスクラブ◇◇◇

作詞 池田 寛
作曲 中村 昭夫

聖の桜仰ぎつつ 多摩の流れに身を清めて
緑の杜に囲まれた 我が故郷の行く末と
社会奉仕に力をそそぐ
集う我等プロバスクラブ
プロバス プロバス 多摩プロバスクラブ

霊峰富士を仰ぎつつ 心の業を磨き合い
豊かな知識身につけて 次の世代の若人の
教え導く糧となる
集う我等プロバスクラブ
プロバス プロバス 多摩プロバスクラブ

◇◇◇ 編集後記 ◇◇◇

北村総務委員長の新たな友情と交流の輪を広げ、「若い」をしなやかに使いこなそうとの発言。横島・近藤両氏の講話、東日本大震災被災者支援活動「ワールド・ハート・プロジェクト」。山田会員の卓話、検定「タマケン」取得の経緯と地域への問題意識。他クラブとの交流記事。鈴木会員の旧陸軍の研究施設をそのまま資料館にした登戸研究所訪問記。平田会員のグルメ・サークル「駒形どぜう」泥鰌料理挑戦記と洒脱な「どぜう」談義。旅サークルの「上高地・安曇野旅行記」。会員の活動、神谷会員の「ちぎり絵展出品記」と小西会員の「護国寺お茶会記」、臨場感溢れる永島会員の「私の一品」など、今号も盛況山です。

そして今号から多摩に住む会員の皆さんのニュータウンとの関わりを書いていただく「私の多摩ニュータウン」が始まりました。1回目は山田会員です。集合住宅の設計に賭けた氏の思いが滲む文章です。

(増山広報委員長記)